

(別紙様式10)

2020年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

【申請区分】: 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究
 産学官連携フュージビリティ・スタディ
 共同研究集会 産学官連携課題設定集会

【研究課題名】: 国際社会における「北極域観光」振興にかかる課題抽出のための会議開催

【研究期間】: 2020 年度

【共同研究員】

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分
研究代表者 (拠点内外) (注2)	上田裕文	北海道大学メディア・コミュニケーション研究院・准教授	景観計画 観光まちづくり	
研究分担者 (拠点外) (注2)	高橋修平	北海道立オホーツク流水科学センター・所長	地球物理学 極域雪氷観測	
	西山徳明	北海道大学 観光学高等研究センター・教授	観光開発国際協力、世界遺産管理	
	小林英俊	北海道大学観光学高等研究センター・客員教授	CBT、 エコツーリズム	
	本多俊和	元放送大学教授	極北地域、文化 人類学、先住民	
	森太郎	北海道大学大学院工学研究院・准教授	建築環境学 寒冷地・室内気候	
	岡田真弓	北海道大学 観光学高等研究センター・准教授	先住民族と 文化遺産	
	加藤知愛	北海道大学広域複合災害研究センター・博士研究員	産業創造 非営利組織経営	
	福山貴史	北海道大学 観光学高等研究センター・博士研究員	雪氷観光創造 資源・人材開発	
	Antti-Jussi Yliharju	Lapland University (Finland) Lecturer	Art&design, Snow& ce installation	
	Mari Partanen	Oulu University (Finland) Doctoral student	Tourism Geography, Cultural anthropology	
研究分担者 (拠点内) (注2)	田中雅人	北海道大学 北極域研究センター・特任教授	産学官連携、北極 域観光・クルーズ	
	大西富士夫	北海道大学 北極域研究セ	北極ガバナンス・	

		ンター・准教授	政策	
	Juha Saunavaara	北海道大学 北極域研究セ ンター・助教授	北欧・北極域社会 と産業	
研究協力者 (注2)				
(注3)				

(注2) 拠点内外については、募集要項別添の北極域研究共同推進拠点を形成する3研究施設の研究者リストをご覧ください。

(注3) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

【研究の内容】

(1) 概要を400字以内(文字のみ)で記載してください。

昨年度成果を踏まえ、本年度は8つの課題分野から重点分野と具体的な地域の選定を行った。3回の小会議での議論によって、本共同研究は、北方圏における東西比較研究を射程に入れた北海道・阿寒とフィンランド・イナリにおける観光課題に焦点をあてることが決定された。また、その際の分析のフレームとして、北極圏等によく議論されるアドベンチャーツーリズム(AT)の可能性が指摘されたが、国内でATに関する学術的研究がないこと、およびグローバル視野でも、AT研究は発展途上であることが分かったため、引き続き検討事項となった。以上をもって、本年度は、次年度のイナリ調査を見据え、阿寒の観光の取組みや課題の調査に特化し、3点の研究成果を出した。先ずDB構築である。特に阿寒観光に関する文献等情報をデータで格納した。次に、それらの文献等情報から課題抽出し、前述の8分野に当てはめた。最後に、阿寒観光の取組みを時系列で概観しまとめた。

(2) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を2000字程度でまとめてください。

昨年度導出した8つの課題分野(①地域文化・先住民の尊重、②コミュニティ優先、③適切な観光振興、④学術研究の推進、⑤ルール・規範の遵守、⑥意識啓発・教育、⑦エネルギー配慮・温暖化対策(本年度より本項目名を修正)、⑧環境保全)から、本年度は課題抽出の精度を上げるため、特に①に重点を置いた上で、調査対象地域をフィンランドのイナリと北海道の阿寒に選定した。このことによって、本共同研究は東西国際比較研究と位置づけられ、また同時に、北海道大学発信による研究成果創出の意義が固められた。

次に比較分析フレームであるが、小会議においては先ず前述のATの可能性が提案された。その理由としては、北極域において多くの議論が見られること、また、国内における学術研究は見られないが次年度に阿寒でATの国際サミットが開催(9月予定)されること等が挙げられた。また、ATはアクティビティを通じて自然や異文化を体験できるツーリズムであるため、先住民文化観光の専門的見地のみからの分析に偏らず、エコツーリズム等を含めた自然体験観光の視点も含有し、結果的に北極域観光研究の特色ともいえる8つの課題分野を広く射程に捉えることが可能になると考えた。そしてさらなる議論では、先住民がATを副業として頼もしく活用しつつ経済利益や文化復興を成している可能性が示唆された。しかしながら、ATは海外においても学術研究としては未だ発展段階である

ことが分かり、分析フレームとして使用できるかどうかは、阿寒やイナリの観光の取組み状況を調査しながら慎重に検討する運びとなった。また同時に、北極域においては、エクストリーム・エコツーリズム、スタディーツーリズムといった観光の持ち得るプラス機能を期待できる観光形態も併せて言及された。

以上をもって、本年度の成果を以下の3点にまとめた。

1. 阿寒観光の取組み年表の作成
2. 阿寒とイナリの観光に関する文献等のデータベースの構築
3. 上記 2.の基礎分析による阿寒観光における8つの課題分野の整理

1.の目的は、次年度予定するイナリ観光との比較研究を見据え、基礎となる属性確認的な意味を兼ね、状況整理を時系列でまとめることとした。このことによって、次年度イナリ観光も同様の整理を行った上で、より精度の高い比較研究が期待できる。加えて、分析フレームの検討の精度向上の可能性が高まると我々は考えた。

2.においては、本学内、市内、道内全ての図書館、さらには Cinii や Google Scholar 等の論文検索サイトから関連文献等を検索した上で、該当する内容を PDF 化した上で格納、データベース化(図 1)した。当 DB は共同研究メンバーにデータ格納サイト「Dropbox」を通じて共有した上で、今後のアーカイブ化の増強を図る。

<Akan & Inari Tourism Database>

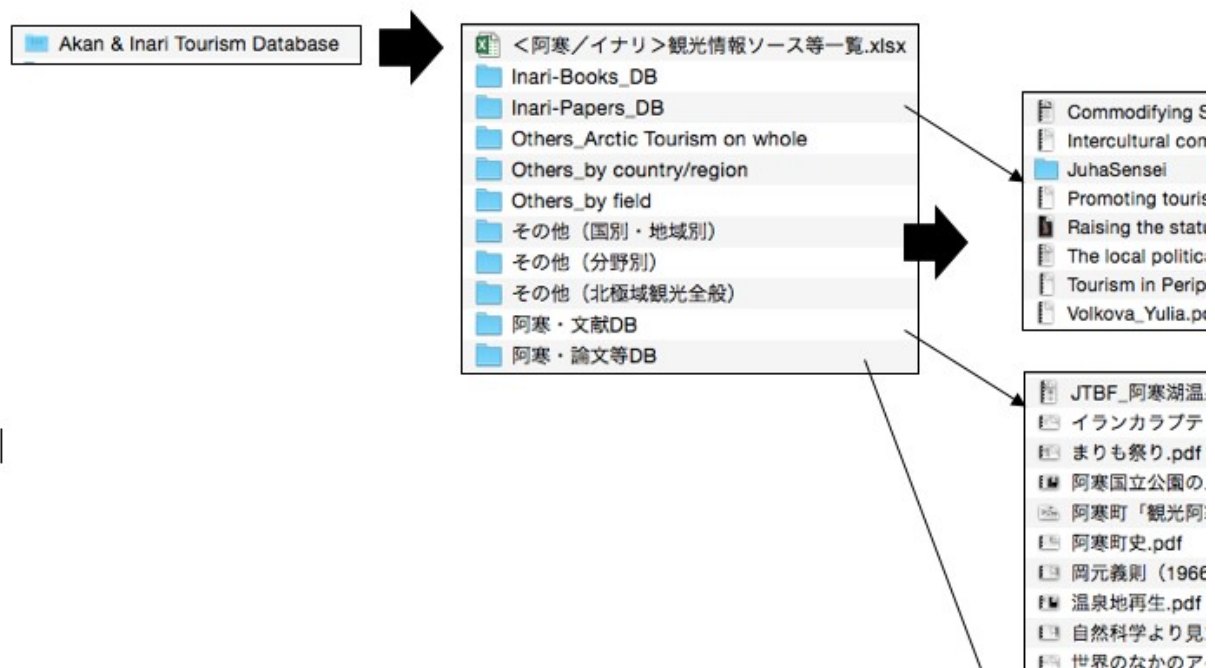


図 1 阿寒とイナリ観光に関連するデータベースマップ(出所:筆者ら作成)

最後に 3.について、上記 DB の内容を一時分析した上で、阿寒観光の基本的な課題を抽出し、8つの課題に当てはめた分類表を作成した(表 1)。なお、表中の白丸(○)は課題への言及を指し、黒丸(●)は、その中でも強く言及されていることを示している。

表 1. 阿寒観光における8つの課題分類表

文献名	文献情報	8分野->	①地域文化・先住民の尊重	②コミュニティ優先	③適切な観光振興	④学術研究の
1. 北大図書館						
1 阿寒町史	阿寒町 (1966)		○		○	
2 阿寒国立公園の三恩人	種市佐改 (1984)				○	
3 世界のなかのアイヌ・アート	山崎幸治・伊藤敦規 (2012)		●	○		○
4 まりも祭り	阿寒観光協会 (2000)		○			●
5 自然科学上より見たる阿寒国立公園	鈴木静ほか (1942)					○
6						
2. 北海道図書館						
1 阿寒観光パンフ裏面	阿寒町		●			
2 観光資源の保護	岡元義則 (1966)				○	
3 観光地経営の視点と実践	日本交通公社 (2013)				●	
4 観光文化223号	日本交通公社 (2014)					
5						
3. 札幌市内図書館						
1 目で見える阿寒国立公園史	種市佐改 (1984)				○	
2 温泉地再生	久保田美穂子 (2008)			○	○	
3 イランカラブテ	秋辺日出男ほか (2017)		●			
4						
4. その他						
1 阿寒湖温泉まちづくりの歴史 最初の7年間の動向	JTBF (平成19年度観光実践講座)		○	○	○	
2						

出所:筆者ら作成

以上3点が昨年度から継続し遂行した本年度事業の内容と主な研究成果である。本成果に基づき、次年度においても継続事業を展開できれば、いよいよ北極域に位置するフィンランドのイナリ地域の観光の取組みや課題との国際比較研究が現実化され、3年間の本事業の集大成としてのアウトプットを、当共同研究メンバーの協働によって創出することが期待できる。

(3) 本共同研究に関する活動・実績等を下表に記入してください。

①研究打合せ、学会参加・集会(注4)、調査等

(注4) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者によるもの

日程(月日)	日数 (日)	活動内容	場所	研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者の参加者名・部署	参加者数 (人)
記入例 2020.11.25	2	研究打合せ	東京	北大太郎、北方次郎、北野三郎	3
2020.07.16	0.5	第一回小会議	札幌 Zoom	上田裕文、大西富士夫、岡田真弓、 田中雅人、福山貴史、森太郎、Juha Saunavaara	7
2020.07.21	0.5	研究打合せ	札幌	田中雅人、福山貴史	2
2020.08.17	0.5	研究打合せ	札幌	森太郎、福山貴史	2
2020.09.04	0.5	第二回小会議	札幌 Zoom	上田裕文、大西富士夫、岡田真弓、 田中雅人、福山貴史、森太郎、Juha Saunavaara	7
2020.11.05	0.5	研究打合せ	札幌	田中雅人、福山貴史	2
2020.11.17	0.5	研究打合せ	札幌	岡田真弓、福山貴史	2

2020.12.04	0.5	研究打合せ	札幌	上田裕文、福山貴史	2
2020.12.11	0.5	研究打合せ	札幌	岡田真弓、福山貴史	2
2020.11.05	0.5	第三回小会議	札幌 東京 Zoom	上田裕文、大西富士夫、岡田真弓、 田中雅人、福山貴史、森太郎、Juha Saunavaara、本多俊和	8

②研究論文

研究代表者並びに、研究分担者あるいは研究協力者が著者の関連論文がありましたら可能な限り記載ください。

論文が複数ある場合は、そのフォーマットとして論文 1 の分をコピーして記載してください。

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、 発行年、論文タイトル、掲載 誌名、巻・号、ページ数、 DOI、出版年月日	福山貴史(2021)「冬季の観光まちづくりにおける未利用地域資源の活用促進メカニズム ―ラップランド地方のアイスホテル創造の事例―」『日本地域政策研究』第 26 号、2021 年 3 月発行、pp.36-45.	
(1)著者名(共著者名含む)、 発行年、論文タイトル、掲載 誌名、巻・号、ページ数、 DOI、出版年月日	Shunwa Honda and Minori Takahashi Whales and Whaling in Greenland: Historical and Contemporary Studies <i>World Whaling: Historical and Contemporary Studies</i> Senri Ethnological Studies (SES) 104:113-132 Nobuhiro Kishigami (ed.) March, 2021	

③研究書等著書

著書名・著者名	出版年月	出版社名

④特許等出願

特許、実用新案、商標

⑤研究発表(資料添付も可)

発表年月日	発表者名(共著者を含む)	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待 講演

					(○)
2021.3.8	福山貴史、上田裕文、高橋修平、西山徳明、小林英俊、本多俊和、田中雅人、大西富士夫、森太郎、岡田真弓、Juha Saunavaara、加藤知愛	「北極域観光」にかかる課題抽出プロジェクト・2020年度成果報告	紋別流氷シンポジウム 2021 連携学術セミナー	Web	

⑥国際シンポジウム等(資料添付も可)

参加をした主な国際シンポジウム等		
開催時期(年月)	国際シンポジウム等名称	招待講演/議長の有無

⑦本共同研究に関し実施(主催、共催、後援等)したシンポジウム・集会(注 6)等(資料添付も可)

(注 6) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

開催日	実施地 (国、県、市など)	形態 (注 7)	シンポジウム・集会等名称	目的及び概要	対象者 (注 7)	参加人数 (海外(注 8))
2020.12.17	札幌 阿寒 東京 Zoom	その他	北極域観光課題抽出本会議	前述の7～11月に開催した3回の小会議で議論された内容の集大成、および本年度の研究成果発表。さらに阿寒アイヌコンサルン理事長・廣野氏によるゲスト講演を賜る。	共同研究員	13(0)

(注 7)

形態:シンポジウム、セミナー、公開講座、ワークショップ、その他

対象:一般、地域、学生、研究者

(注 8) 海外機関に所属するもの

⑧本拠点共同研究に係る成果が科学研究費などの外部資金の応募(予定を含む)やプロジェクトに発展した例があればご記入ください。

・プロジェクト名 ・代表者・関係者(所属)	・プロジェクトの主な 財源	プロジェクト期間	・プロジェクト概要 (目的・期待効果、規模、参加

・関係研究者 ・予定の場合は、(予定) と記載してください	・金額		国等) ・これまでの本共同研究との関 連性 (300 字程度)

⑨研究成果が一般社会産業界などに還元(応用)された事例や新しい研究分野の開拓や教育活動に反映された事例(資料添付も可)

⑩その他国際研究協力活動事例

事業名	概要	受入人数	派遣人数

⑪学会賞等受賞、アウトリーチ、取材、その他

年月日	所在・出典・新聞名等	受賞者・関係者(所属)	研究課題名・賞名・内容等

記事コピー等を添付してください。

⑫コロナ禍の影響と対策

本共同研究へのコロナ禍の影響と対策(改善・代替策、計画変更、工夫等)、助成金執行率(%)について記述してください。

影響の事象	対策の有無と内容 (計画変更・中止、改善・代替策、工夫等)
完全対面形式での本会議開催および懇親会を断念せざるを得なかった。	本会議開催は Zoom とのハイブリット形式の上、札幌会場では換気やマスク着用、適正距離の確保など感染対策に努めた。懇親会は中止以外の選択肢はなかった。